

〈活動報告〉

岡山大学中央図書館・個人文庫「杏村文庫」の調査： 詩人との交友を中心に

鈴木亮三^{*1}

Survey of Private Collections “Kyoson Collections” in Okayama University Library: Focusing on His Friendship with Poets

SUZUKI Ryozo^{*1}

1. はじめに

本報告筆者は、2021年7月21日、2024年10月7日に、岡山大学附属中央図書館の土田杏村文庫を調査した。第一回目の調査については、本誌第3号で、杏村の師西田幾多郎らの哲学関連の献呈抜刷・本への署名を中心に、一部を報告した。今回は、第一回の調査報告時には除外していた、詩人を中心にした文芸関係の交流の痕跡としての署名入り謹呈本に焦点をあてて報告したい。杏村が京都帝国大学文学部哲学科に入学する以前から育んでいた、山村暮鳥や萩原朔太郎ら詩人との交流を記念する貴重な署名入りの書物を中心に紹介したい。

2. 杏村による「私の書齋」

管見では、杏村は二度ほど自分の書齋についてエッセイを残している。そのうちの一つ「私の書齋」の文章を紹介したい。

私の書齋、先ず大いさを言へば、四畳半、六畳、十畳の三室から出来ている私の家——といっても野の中の極めて小さいものだが、その全面積の約半ばが私の書齋だという訳である。本来この家を建てる時に私は京都の郊外もうんと離れたところに、他から読書執筆の妨げを受けないようにということを考へていたのだ。随って書齋はまた家の人達の住んでいる処から話声の聞えない処へと選んで別構へにして建てた。始め二室から出来た洋館だったが昨年十畳一室を増築した。ベッドをここへ置いて、今では終日をその中に籠居している。桜井祐男君の拙宅への訪問記を見ると、「ブリキ屋根が見える」と書いてあるが、ブリキではなく浅野スレートの屋根なのだ。もう一つ序でに言うと桜井



「紫野に新築せし頃の書齋」全集第14巻より

君は田の中に小さな雑木林があつてその中に拙宅が建っているように言つてあつたが、これも雑木林ではなく、後で植えた拙宅の庭木なのだ。ただ植木師などを入れないで伸び放題にしてあるものだから雑木林にしてはれる。他の某君の訪問記には、病み上りの頭髪のようにと書いてあつたが、いかにもその通りである。書齋の中には書物が雑然と置かれている。最初私は四畳半を応接室に使っていたのだが、書物の置場に窮するとそんな悠長なことは言つてられない。ここには書架を二つ置き、周囲の壁には出来るだけ多くの棚をつくつて全然の書庫にしてつた。下にも雑然と書物を置いてある。六畳の室は書齋にも応接室にも書庫にも使っている。狭いこと甚だしい。十畳の室はベッドを置いて全く私の居室だ。近来はこの室をおもに書齋として使っている。狭いこと甚だしい。十畳の室はベッドを置いて全く私の居室だ。近来はこの室をおもに書齋として使っている。書物はどの室にも詰まるだけ詰まったので、次第に廊下を侵蝕し、他の居室を侵蝕し、寢室の床の間の上まで書物の山積となつてつた。起きるも寝るも書物の中に埋まっているのは愉快なことではなく、さっぱりした一

*1:岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科

*1:Graduate School of Interdisciplinary Science and Engineering in Health Systems, Okayama University

室を欲しいと思っているが、そんな贅沢などはとても言えないのである。十畳の室、即ち今の書斎は、日本物の研究書を集めることにし、今はそれに最も多くの骨を折っている。民族学的研究の書は遺漏なく集めようとしている。文学の方では、種々の古典文学書、俳書、歌書を集めることに骨を折る。演劇の本も集め出している¹。

杏村の経歴についてはここであらためて紹介しないが、その書斎にあった書物のうち、雑誌類を除いて、ほぼそのままが岡山大学附属図書館に収蔵されることになった経緯について、文献に残されている記録をもとに前回の報告に付け加えたい。前回の報告では、以下のように記しておいた。

図書館 HP によれば、その由来は以下の通りである。「土田杏村(1891~1934)の旧蔵書。土田杏村の実兄で画家の土田麦僊(つちだ ばくせん)と親交のあった大原孫三郎氏が土田杏村逝去後遺族から購入し、昭和16年6月に第六高等学校に寄贈されたもので、昭和24年本学が引き継いだ。土田杏村は大正~昭和に渡る思想家・文明批評家であり、文庫の内容も哲学・思想・宗教・文学・社会学・美術を網羅している」²。麦僊は杏村の没した2年後に後を追っている。この説明によれば、購入者は大原孫三郎(1880-1943)であるが、文庫所蔵本の扉には、「土田杏村文庫 寄贈者 大原総一郎」(写真1参照、左右田喜一郎『文化価値と極限概念』)という朱印が押されていることから、直接には孫三郎の長男総一郎(1909-68)がこの「寄贈」に関与している可能性を考える必要があるだろう。第六高等学校は、総一郎の母校でもあることも、寄贈先選定の大きな理由になったと思われる。その際、「遺族」とは麦僊ではなく、杏村の未亡人千代らを指す可能性もある³。

直接の寄贈先であった旧制第六高等学校に在職し戦後の岡山大学でも教鞭をとった大野真弓(1907-2002)の証言によれば、孫三郎の長男総一郎氏がこの「寄贈」に関与していたとのことである⁴。六高の側は「大原家と親しかった松尾哲多教授」が「衝に当たった」由である。ともあれさらなる調査を今後も続けたい。ただし、大野氏によれば、「一万冊余」の書物が整理の途中であった、とのことなので、当初は現在の収蔵数よりも多かった可能性がある。なんらかの選別が行われたかもしれない。

大野は杏村文庫の思い出を次のように語っている。

六高在職中、杏村文庫には随分お世話になった。西洋史の本はどういうわけか少なかったけれども、哲学や社会科学の基本的な文献はたいてい揃っていた。戦争末期昭和二十年六月の岡山市空襲の際にも幸い炎を免れ、戦後の書籍飢饉の時代には、六高生の渴をどのくらい癒したのか。文庫は現在岡山大学附属図書館に移管されているが、これを六高に寄贈された大原氏の見識に改めて敬意を表したい。

杏村の「私の書斎」から大原氏、六高生の手を経て、貴重な書物がかかり状態のよいまま移管され今日に至っている。

3. 謹呈署名のある書物

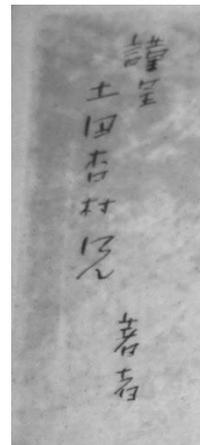
ここで紹介するのは、杏村文庫のなかの署名入りの文芸関連の書物すべてではないことをお断りしておく。杏村自身も、実質的な交流のない人々から多くの手紙や謹呈本が送られてきていたことを記しており、どこまでが杏村にとって重要な人物であるかは、今後のさらなる研究が必要である。署名謹呈本が確認され、その上で公刊されている文書のなかになんらかの交流の痕跡の認められる者について、列挙していくことにする。

・山村暮鳥『風は草木にささやいた』(1918)



2024年は、本名「土田八九十^{はくじゅう}」である山村暮鳥(1884-1924)の没後100年にあたる。同じ姓の杏村が暮鳥と知り合った正確な時は明らかではない。暮鳥の詩集『風は草木にささやいた』は、二人の共同の産物とまで、暮鳥

自身が考えていたことは、杏村宛書簡から分かるが、この書簡を収録しているその全集の編集者解説は、二人の交流についてはおろか、当の詩集にまつわるエピソードについても、ほとんどなにも語っていない⁵。杏村は評論文で暮鳥(1884-



¹ 土田杏村「私の書斎」『土田杏村全集』第15巻、第一書房、1938年、30-31頁。本全集からの引用は、以下では(15,30)のように、巻数と頁数のみで示し、文中に組み込む。

² 図書館HPの「個人文庫」の紹介からの引用。

<https://www.lib.okayama-u.ac.jp/collections/kojinbunko.html> なお、これ以上の記録は残されていないようである。

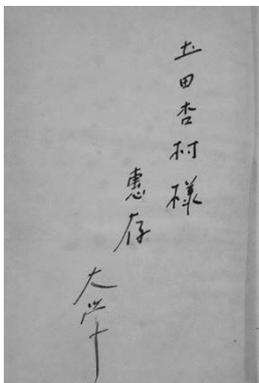
³ 鈴木亮三、岡山大学中央図書館・個人文庫「杏村文庫」の調査：哲学思想を中心に、統合科学(3)、2023年、69-71頁。

⁴ 大野真弓「杏村文庫と私」『土田杏村とその時代』上木敏郎編、新徳村教育委員会、1991年、626-628頁。なおこの書物は、上木が1966年第1号より1984年第17号までの間に自費で出版した雑誌の合本復刻である。上木氏が当時存命であった杏村の遺族や友人たちの証言を蒐集した今日の杏村研究に欠くことのできない資料と研究が保存されている。以下でのこの書物からの引用は、(K626)のように頁数を略記し文中に組み込む。

⁵ 暮鳥のいくつかの評伝を見ても、杏村との交流の発端についても、杏村との具体的な交流についても、ほとんど触れられていない。例えば、

1924)を讀ると、暮鳥は書簡で、「自分はあなたを信ずる。つまり今度の詩集は共同作業にしたいのであります。従来の所謂おぎなりの序跋は御免なので——即ちニイチエがワグネルの音楽に対してあの「悲劇の出生」をかいたような意味で、あなたの芸術的批判乃至美学に此の手をさしのべるのであります。……此の世界無比なる迷信にして無知の国、日本のためにいざ戦わんかな。おお我が新しきニイチエよ！」(1917年10月30日)と呼びかけた。杏村は本詩集に長い「跋」を書く。暮鳥を「直裁に物の掴める人」、その詩を「生(いのち)の糧」と評し、終生の友とし、その生活を精神面でも経済面でも支えていた。(K129-137)で、上木が杏村の暮鳥宛書簡と両者の交流について詳細に紹介している。)

・堀口大學『堀口大學詩集』『砂の枕』。(1928, 26年。写真掲載順)

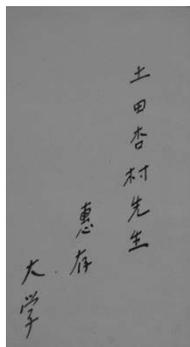


堀口大學(1892-1981)は、大田黒元雄(1893-1979)、松岡讓(1891-1969)、土田杏村とあわせて第一書房の「ブレーン」、あるいは、杏村を除き、松村みね子(片山広子 1878-1957)を加えて「第一書房四天王」と称された⁶。

堀口の著作・翻訳を含めると、本文庫の1人の著者のものとしては、最も多いコレクションであり、31点にのぼる。そのなかの多くに

謹呈署名を見ることができる。

堀口は他の「ブレーン」とは距離をとっていたとの証言もあるが⁷、杏村は堀口の訳業について「完全なる教養と十分な語学力とその達意豊醇なる邦訳の表現法とを持っておられる」と記し賞賛している。(15.475-8)



田中清光『山村暮鳥』、筑摩書房、1988年。以下の「年譜」によれば、『風は草木に〜』刊行後の1918年5月中旬に奈良で杏村と顔を合わせたようである。『山村暮鳥全集』、第4巻、1990年、833頁。なお本巻には晩年までの杏村宛書簡8通が収められている。

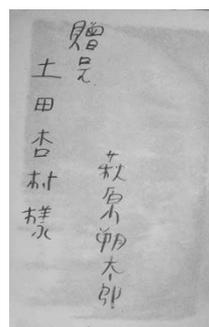
⁶ 林達夫他編『第一書房 長谷川巳之吉』、日本エディタースクール、1984年、21頁。

⁷ 長谷川郁夫『堀口大學』、河出書房新社、2009年、440頁。なおこの

・萩原朔太郎『新しき欲情』(1922年)。



杏村の妻千代子によれば、東京高等師範時代(1911-1915)から、詩人歌人に知人も多くなった⁸。雑誌『感情』の群像——とくに山村暮鳥、萩原朔太郎(1886-1941)らと手紙で通じていた。1917年に朔太郎は、『月に吠える』——残念ながら、本文庫に収められていない。——について「拙詩集御読み下された由悦ばしく存じます。あの切った所は警保局へ皆とりあげられて全くありません。」(1917年7月4日付。朔太郎全集所収。賀状のやりとりも残っている。)と杏村宛書簡を残している。朔太郎は編集後記で(6月号)、「諸家に甚大なる教訓を戴いたことを感謝している」と述べ、そのなかに杏村の名を記している。



京都帝大入学後の同年に、後に妻となる千代子への書簡に、「今日山村君

からの葉書が来て、雑誌の「感情」の八月号は山村暮鳥詩集として僕に献本したと書いて来た。山村にせよ萩原にせよみんなずっと年配がぼくよりは上で、僕よりは先輩の筈なのに、皆んな僕を大事に思い、たよっていてくれる。すべては逢わないほうがいいのだ。書いたものだけで見てくれればよい。」「今のところ二人の詩が誰のよりもよく僕には見える。」(1917年7月28日)と記した(雑誌の献本自体は、「萩原がずるくして9月号と一しょになって了い月末に出すそうだ」同年8月18日とある)⁹。その後の交流の証が本詩集への署名である。朔太郎の全集には、1932年の杏村宛賀状までが収録されている。なお、朔太郎は第一書房の常連であった。娘萩原葉子(1920-2005)が次のような思い出を記している。

それから、私が二階に行つたとき、父が書をの化や畳の上に検印紙を並べて、一枚ずつ、不器用な手つきでいいねいに印を押していることがよくあった。私はいつも、をんだらうと思って不思議だったが、ある時、

「それなあに？」と、聞いた。

「これは、本ができるを押すものだよ。」

「どうして押すの？」

「なんていう本？」

書物には、杏村と大學との交流については、何も記録されていない。長谷川による長谷川巳之吉伝では当然杏村の名が頻りに現れる。前掲著者『美酒と草囊 第一書房 長谷川巳之吉』、河出書房新社、2006年。

⁸ 土田千代子「詩歌と杏村」、杏村全集第13巻附属「紫野より」第四号。

⁹ 土田杏村『千代子への手紙』、全国書房、1946年、220、265頁。

「葉子にはまだ解らない詩の原理の本だよ。」

父はそういいながら、とても真剣に、そして楽しそうに押しつけていた。私は、第一書房のお人形のついた検印紙がほしくてたまらず、

「これ、一かほしいの……」と、父にせがんだ。すると父は、

「これがか？ これは子どものおもちゃじゃないんだよ」と、さも困ったように笑っているのだ。二階の窓から見える森の向うには、富士山がくっきり見えていた¹⁰。

朔太郎も、葉子とのやりとりのなかで出てくる第一書房刊『詩の原理』(1928)のなかで、「日本の詩に定型律が出来たのは、支那の詩にその規約があるのを見て、一種の文化意識から模倣したものと言われている。自然のままに発展したら、原始の自由律で行ったのだろう。(清野〔暢一郎?〕博士の考証、土田杏村氏の研究等を参照せよ。)」と記し、杏村への敬意を記している¹¹。ちなみに、朔太郎は、旧制第六高等学校に在籍していたことがある(1908-1909 はじめは寮生活、後、岡山市大字国富〔現在の中区国富〕106 小川與彌次方に下宿)していたようである。現在の岡山城から東部の地区。).

4. 詩人たちと共有した感性

朔太郎「竹」『月に吠える』(1917)

ますくなるもの地面に生え、
すどき青きもの地面に生え、
凍れる冬をつらぬきて、
そのみどり葉光る朝の空路に、なみだたれ、なみだをたれ……

暮鳥「だんす」『聖三稜玻璃』(1915)

……はるきたり あしうらぞ あらしをまろめ
愛のさもわるに 烏龍茶をかなしましむるか
あらしは 天に蹴上げられ

杏村「田舎」(1917) (K169)

初夏のある朝、大空は一面かがやきわたり
わたしの心は水のやうに 落ちついた。
……都を避けてとほく山のふもとに住まっているある一人
の友人を思いうかべる。
まっくろな土に向う執着。

唐突であるが、ここで、朔太郎、暮鳥、杏村の三人にどのような感性を共有し、互いに共鳴しあっていたかについて、ごく簡単に、述べておきたい。上に掲げた三つの詩には、ある共通点が存在すると言ったら、大げさにすぎるであろうか。

ここには上下の運動が詩のなかに組み込まれている。三人は、

内面の上下の起伏を客体的世界のなかでのそれとして表現している。あらゆるもののうちに対立を見だし、それらの統一を求め、これを「象徴」という言葉で言い表した杏村からすれば、これらの詩には、内的世界と外的世界だけでなく、上下という対立が、一つの言語表現として、詩のなかに見事に表現されている。

朔太郎の「竹」は上に向かって激しく突き進み、それを見る詩人の眼から涙が下方に落ちる。暮鳥の足裏はかなしみのなか天に向かって蹴り上げられる。杏村の詩はやや素朴にみえるとしても、頭上の大空から足下の土にまで縦横無尽である。言語による実在の充実した把握は、杏村の言う「象徴」によって可能になる。情意と理知との統一としての詩/象徴は、詩人たちとも共有していた思想であることがわかる。ちなみに、朔太郎は当時の象徴詩の流れに逆らってこの語から遠ざかっているように見えるが、実際には、独自の「象徴」概念を持っていたのである。それは、杏村のそれにちかい。例えば、『月に吠える』の序では次のように言う。「詩の表現は素樸なれ、詩のほひは芳純でありたい。……詩は神秘でも象徴でもない」。しかし、『詩の原理』では、

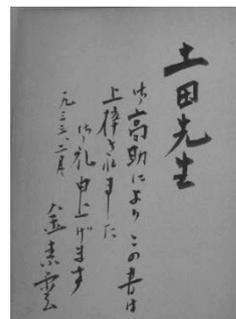
「象徴が知的的の「頭脳」によってされないうで、主観の感情によって温熱されたる、心情の意味としてされなければならない。」(H6,127)と述べているからである。よく知られているように、朔太郎は、暮鳥の「だんす」を激賞している。杏村の詩にある「友人」はおそらく「草木のように生きよう」として畑作を始めていた暮鳥のことで、朔太郎はこのころの暮鳥の詩については、追悼文「山村暮鳥のこと」にあるように、認めていなかったようである(H8,125)。

5. その他の謹呈本など

・金素雲『朝鮮口傳民謡集』(第一書房、1933年)



杏村から始まった交流のようである。1967年に上木氏が本文庫で調査し、杏村が金素雲と関係があったことを突き止めた



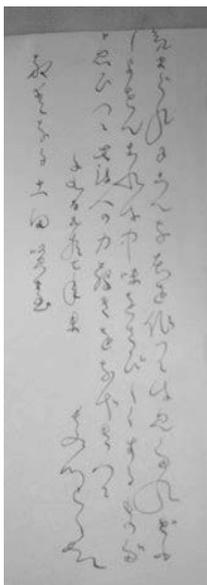
際の証拠の書物である(K697-699)。その後、上木の本人への調査で、第一書房からの出版を斡旋したのは、杏村であることが分かったとのことである。

上木からの問い合わせがあった後に、金は自伝で杏村とこの書物と

¹⁰ 萩原葉子『父・萩原朔太郎』(新版)、筑摩書房、1976年、103頁。

¹¹ 『詩の原理』、第一書房、1928年。;『萩原朔太郎全集』第6巻、筑

摩書房、1975年、160頁。この全集からの引用は、(H6,160)のように略記して本文に組み込む。



の思い出を書いている¹²。金と北原白秋との関係は、金の第一詩集に白秋の序があることから知られているが、杏村との関係については、上木のこのエッセイと上木の編んだ雑誌への寄稿の他に記録がなかったのである。

本文庫所収に収められた『朝鮮口傳民謡集』の扉には、「土田先生 御高助によりこの書は上梓されました 御礼申し上げます 一九三三年 金素雲」と書かれている。このほか、金の謹呈署名入の書物が数冊収められている。

このほか、田中宇一郎（不詳）、田中冬二（1884-1980、第一書房の人脈か）、高群逸枝（1894-1964、小説『黒い女』解放社、1930年に署名。杏村は『文学理論』（1932）でその著作を評価している。）らからの署名入り謹呈本が確認できた。西条八十（1892-1970）の『西条八十詩集』（第一書房、左写真）には、手紙のようなものが貼り付けてあるが、八十のものなのかどうかは判断できなかった。上記の交流関係の実質について、今後も調査研究していく予定である。

6. 杏村のコレクションした図録



本文庫には、杏村の美術研究の基礎をなす多くの図録が収められている（左は、現在の書架の様子の一部で、図録等が収められた箇所の写真）。本報告冒頭で引いたエッセイ「私の書齋」には、次のような一節が続いている。

「美術は奈良を中心としての古仏教美術関係のものが最も多いのだが、それも大分充実してきたので、鑑鏡、古織物、古陶器等の美術の書をも集めはじめた。これらの美術書はみな高価だから全く困ってう。併し後になって見れば自分の蒐集も世に珍しいもの一つになろうかと思う。仏教美術



の写真だけはもう大抵遺漏はない。「法隆寺大鏡」「七大寺大鏡」



「日本国寶全集」を始めとして集められるだけの文献を集めている。朝鮮、支那、印度の美術写真も苦心して自分の財政の許す範囲で多くを買い集めようと思っている。」（15. 32）

このようにして買い集められた膨大な図録は、兄麦僊とともに絵をよくした杏村が行った、智積院障壁画をはじめとした多くの実証的な美術研究の基盤となった¹³。



左：杏村による下醍醐寺仏頭のスケッチ、右：書齋の杏村、ともに全集14巻

謝辞

本報告のための調査にあたって、ご協力いただいた本学図書館学術情報サービス課 調査相談グループの皆さまに感謝申し上げます。本報告内の写真は、調査時に本報告筆者が撮影したものであり、掲載にあたって貴重資料掲載許可（を図書館より取得しています令和7年1月27日付）。本文中の資料に関する認識の責は、もちろん本報告筆者にあります。

なお、この活動報告は、岡山大学附属図書館で開催された、第32回知好楽セミナー「土田杏村と同時代の文化人たち～西田幾多郎から萩原朔太郎まで～」(2024年10月30日)のスライドの一部を用いています。セミナー開催にご尽力くださった、附属図書館・佐藤千春 学術情報サービス課長、附属図書館副館長／岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域・本村昌文教授にこの場をお借りして感謝申し上げます。

¹² 『天の涯に生くるとも』新潮社、1983年刊。引用は講談社からの再版。1989年、179頁以下。また、金による「杏村先生の思い出」（1972年）（K573-579）参照。

¹³ この件に関しては、以下が詳しい。土居次義「土田杏村氏のこと」

（K622-624）、および、多田羅多起子「日本におけるモレツリ法受容の一例相：土居次義による障壁画研究への応用にいたるまで」藝術研究、第34号、広島芸術学会、2021年、1-16頁。